

## Editorial

滋賀医科大学に看護学科が創設されて9年経過した。この間、本看護学科で活発に営まれてきた教育や研究活動の成果を体系的に蓄積したり、学外へ発信していくための学術的基地を私たちはもっていなかった。しかし、今日、ここに『滋賀医科大学看護学ジャーナル』を創刊できることになった。二十世紀の後半、看護学をリードしてきた先達たちは折に触れ看護学が社会にとって有用な独立した学問として成立していくためには、対象となる固有の現象を同定し、固有の言語と固有の尺度を開発していかなければならないと主張してきた。しかしそれだけでは不十分である。研究や実践の成果を蓄積したり、発信していくための基地としての学術雑誌が不可欠である。だから本学科で、そうした学術雑誌を創刊できることになった喜びは言葉に尽くせない。私たちの学術雑誌を発刊したいという学科の意志を汲んで、励まし、支援して下さった吉川隆一学長には心からの感謝を申し述べたい。

研究には幾つかの段階がある。問を立てる、関連文献を検討する、研究をデザインする、データを収集する、データを解析する。どの段階の取り組みも真摯な努力なしにはできない。問が立てばその時点でその研究はもう半分は終わったようなものだという人びとがいる。いや、そうではなく、データが集まってからだという見方をする人びともいれば、データを解析できた段階だという人びともいる。しかし研究の一連の過程のなかでなんとと言っても難しいのは研

究の成果を論文にまとめ上げる作業であろう。どれほど優れた研究であっても、それを論文にまとめ、発表し、誰かの目にとまって読んで貰わないとその成果は誰にも伝わらないので人類の共通の知にはならない。

論文を書いていく際に心しておきたいことがいくつかある。研究内容が読む人に正確に伝わり正しく理解されるために、平明に記述すること、言葉を明晰判明に使うこと、主語と述語が明確であることなどである。人を惹きつける論文はそのタイトルからして魅力的である。研究の焦点が明晰判明な言葉で無駄なく述べられていて、テーマを読めばその研究は何を、どの様に扱っているかが具体的に思い浮かぶので、読んでみたいという気持ちに誘われる。アブストラクト(要旨)も同様である。何を、なぜ、どの様な方法で研究し、どのような結果が得られたかをたかだか数百語で述べるには自分の研究を十分に知り尽くしていなければならない。看護学で多用される質的記述的研究では論文をまとめ上げる際に主語と述語をよほど明確に自覚していないと、論旨がいつの間にか脇道に逸れて研究目的からずれた結論を導きかねない。

『滋賀医科大学看護学ジャーナル』は幸い学外の研究者にもオープンにされている。競い合い、協調しあって看護学の研究を発展させていきたい。

滋賀医科大学看護学ジャーナル

編集委員会委員長 野島 良子